

第2節 神於山の歴史

1. 歴史

古代から和泉地方は恵まれた気候により、弥生時代から人が住み着いており、また大和に近かったため古くから開発され、平地部ではどこを掘っても弥生遺跡などの埋蔵文化財があるといわれている。

岸和田では、遺跡は春木川や天の川流域に多い。当時の土木技術では春木川・天の川が水田耕作に利用できる唯一の流水であったので、その水の源である神於山は、命の水を発するところとして大切にされた。水田開発が進むに連れ、小さな川や湧き水では十分な水量を確保できず、神於山周辺に多くのため池が造成された。

轟川・春木川の水源であり、水への信仰に支えられた神於山は、古くから「神のおわす山」として、山そのものが神体山として崇拜の対象であった。仏教の伝来、山岳信仰と仏教との習合、修験道の修行の場となったことによって更に信仰を深められた。そして修験者のこもる神於山は人々の尊敬・崇拜をあつめて、そこには立派な寺院が建てられた。

その中でも神於寺は中世 108 坊の大伽藍を誇ったといわれており、南北朝時代には他の和泉の寺達を含めて、千早・赤阪とともに南朝の拠点となったとされている。

そんな神於寺であるが、1484 年には根来寺との争いに敗れ、その勢力下に置かれ、更に豊臣秀吉の根来衆討伐によって完全に灰燼に帰してしまった。しかし、その後再建され、寛政 8 年(1796)出版された「和泉名所図会」には本堂、宝勝権現及び 10 余りの坊舎があると記されている。このように神於山の歴史は、神於寺の歴史に大きく影響されていた。

岸和田の人とくらし ~70 年の昔を聞く~

- ・神於山からは鉄、金、銅が採れた
- ・今は竹に覆われている国見台は、昔は砂山で木が全く生えてなくて見晴らしが良かった
- ・今は作らなくなったが、昔は周辺で茶を作っていた
- ・かつてはタバコ生産が岸和田でも行われ、岸和田産のタバコは香味絶好と評判であったという話があります。
- ・昔はミカンの苗を作っていて、和歌山県の有田の方へも苗を持っていったので和歌山のミカンは岸和田からのものだという説もあります。

2. 神於山の植生遷移

神於山の自然植生は、麓に存在する山直神社、意賀美神社、神於寺の社寺林としてわずかに残っているシイ・カシ類を中心とした常緑広葉樹林であったと推測される。

しかし、神於山は標高わずか 296.4m で、人里近いところに位置し、また古来より経済文化の中心地に近かったため古代には土器の製作、中世には燃料として大量の木材が必要となり開発が進み、平坦部に接するところは殆ど畑と化し、険しい傾斜面・山頂付近も繰り返し薪炭、建築、家畜の餌、田畑の肥料として伐採・落葉かき・下草刈りなどの行為が加えられた。

江戸時代には既に社寺林以外の森林は消滅し、そのため表土が流出し、土質は酸性化しアカマツ以外の樹木は育たなくなった。このアカマツもある大きさになると、この地域に産出する良質の青色粘土を原料とした「いずみがわら」の製造のため燃料として伐採されるというようにその繰り返しの激しい地域であったといえる。

そのため現在は自然林の姿をとどめているところはなく、昭和 30 年代までは比較的若いマツ・コナラなどに被われ、また、平坦部に接するところはミカンを栽培する果樹園、タケノコ栽培の竹林が代表的な植生であった。

昭和 40 年代よりマツが枯れはじめ、50 年代前半には神於山のマツがほぼ消滅した。マツが枯れ始め、消滅した跡地の植生の変化については、約 10 年(昭和 49 年～59 年)にわたり、神於山一号園路の地点を監察した記録が「岸和田の土と草と人(小垣 廣次著 昭和 60 年)」に記述されている。

マツが枯れた後、10 年後には

高木(6m) ハゼノキ・クヌギ

亜高木(4～5m) アカメガシワ・クヌギ・コナラ・アラカシ・クス・エノキ・ヤマモモ

低木(2m以下) ガマズミ・クサギ・タラノキ・ヒメコウゾ・イヌビワ・シャシヤンボ・ヒサカキ・ネズミモチ・ソヨゴ・アラカシ・シラカシ

草本 フユイチゴ・ネザサ・ヤブコウジ・ヒサカキ・ベニシダ

が競うように成長し、マツが枯れ始めた直後、生育していたススキやワラビは目立たなくなると記されている。

しかし、現在ではそのマツ枯れの跡地に新たに竹林が侵入・繁茂し、上記の樹木を被いつくし枯らしつつある。